

新約聖書に現われた原始教会の賛美歌 (1)

金 田 義 国

序

今日、われわれの教会でなされる礼拝において、説教の位置は不動のものとなった。しかしながら、一般的にみて礼拝の重要な部分を占めるべき賛美歌は、単にプログラムの装飾をなす程度にしか扱われていない。このことは実に遺憾であるが、反面致し方のないわれわれの教会の実状でもある。

極言すれば、賛美歌に対するこの不当な取扱いは、二つの面の無責任さが招いた当然の現象である、と言わねばならない。一は、賛美歌を取り扱う側に神学的反省が不足していることであり、二は、現在行われている賛美歌自体にキリストの福音が生かされていない、という事実である。バルトやブルンナーは現代の賛美歌を痛烈に批判しているが、(礼拝と音楽、一の五を参照)、これらの批判はそのままで積極的な妥当性を有するものではあるまい。さきに述べた二つの面の責任が追求されるとき、われわれが当然帰着する点は、それでは原始キリスト教会で賛美がその本質においては一休何を意味しており、賛美歌が一休何を歌っていたかという事柄であろう。われわれが新約聖書において原始教会

の賛美歌を見出し、かつその本質的内容が何を指し示していたかという点を明白にするときに始めて、賛美歌の現在受けている不当な扱いに対して正当な抗議をなすことを得るし、また、実践面でも正しい賛美歌の方向を示し得るのである。

一、用語

賛美、または賛美歌に関する新約聖書の用語は実に多種多様である。それらは、実際の用例においても種々なる意味をとることがあるが、⁽¹⁾重要なものは

hymnos, hymeō, psalmos, psallō, ōdē, ōdō, ōnēsis, aineō, ainos

の九語である。これらのほか、

ēraunos, ērauneō, eulogia, eulogēō, eulogētōs, doxa, doxάζω, ōrakilēō, metanōō, moureōs

なども、しばしば賛美に関して用いられている語であるが、特に、*ēsomologēō* は一〇回の用例のうち「さんびする」の意で二回、「ほめたたえる」が二回、「告白する」の意味で五回、「承諾する」一回、で賛美を信仰告白と結び付ける意味から実に重要な語である。

次に、重要な九語の意味は以下のように示されよう。

hymnos 賛歌、祝祭歌、聖なる歌、賛美歌

hymeō 賛美を歌う

psalmos 詩篇、詩（旧約の引用ではなく、歌われた形としての詩篇）

psallō 髪を引張る、楽器の弦をかき鳴らす、ハープなどを演奏する、賛美を歌う、賛美歌を歌う

ōdē 歌、歌うこと、聖歌、賛美歌

ôdô 賛美の歌を歌う、ほめたたえる

hûbers 「さんび」(のいけにえ) ヘブ一三・一五

aiwêw ほめたたえる、賛美する

aiwos 話、格言、諺↓賛美、賛美の辞

である。賛美、あるいは賛美歌に関する用語は実に多種多様であり、しかも広範囲にわたって用いられている。しかしながら、われわれはここで不思議な事実を発見するのである。それは、ヨハネによる福音書には、すでに述べたような意味で、これらの語が一回も用いられていない、という事実である。これは恐らく、クルマンをして「ヨハネによる福音書の場合も、やはりそれを貫いて礼拝に関連ある一本の線を辿り得る」⁽⁴⁾と実証させたこの福音書の礼典性が、逆に、当然用いられるべき賛美に関する語を不必要とみなして省略させたのではなからうか。

二、外形の研究

(1) 種類

イ、「詩とさんびと霊の歌」について

次に、賛美歌の外に現われた形に関して考察を進めたい。まず、種類についてであるが、エペ五・一九とコロ三・一六には「詩とさんびと霊の歌」*psalms, hymns, cantic*と重要な語が三つ並べて記されている。ネストレのテキストに従えば、コロ三・一六は *psalms, hymns, cantic* *et cantic* *et cantic* *et cantic*……となっており、ある写本には *hymns* の前後に接続詞 *et* を入れているのがあるが、有力なものとは言えないので、加筆であるとみてよからう。ところが、原文がこの接続詞を記さなかったとすれば、これら三語に厳密な区別がなかったとも考えられる。その上、*psalms* は *psalms* のみでなく、*hymns* をも形容しているとも解し得る。もしそうだとすれば、この文は「詩と聖なる賛歌、す

なわち聖歌」と訳出されてもよく、また、*hymois* の説明が *qôlais neumatikaïs* であつて、パウロは二種類の賛美歌について述べているとも推察される。しかしながらわれわれは、エヘ 五・一九において判然と *psalmois kai hymois* *kai qôlais neumatikaïs* のように三語が区別して用いられてあることから、よしこの手紙がパウロの自作でなかったとしても、新約時代においては三種類の賛美歌が存在していたと考えたい。すなわち、「詩」と「さんび」と「霊の歌」の三つである。けれども、パウロの頭には同じ事柄が一つだけあつて、それが三種類の表現でもって表わされ得るという可能性だけは保留しなければならない。マクドナルドは、多くの学者がこの箇所において、パウロは頭の中では判然とした区別をしていないと考えている理由を指摘している。⁽⁶⁾

われわれも、もちろん「詩とさんびと霊の歌」がそのまま原始教会の賛美歌の種類を表現しているとは考えない。しかし、パウロがそれを表現するのに、*psalmos, hymos, qôth* の三語を用いている事実は否定し得ないし、「詩とさんびと霊の歌」と訳出されているのも正しいと言わねばならない。ただ二回のみ用例しかもたない *hymos* が、三世紀までのキリスト教徒にとつて、嫌がられた語であつたことは注意すべきである。何故ならば、この語は異教徒達の祝祭歌を意味する一つの流行語であつたからである。⁽⁸⁾ だからこそ、パウロがこの語を用いている事実を尊重しなければならぬ。しかるに語の意味のみをせんさくしては賛美歌の種類を見出し得ないことを知るのである。ここで、コロ 三・一六における E・F・スコットの釈義の助けを借りよう。

スコットは「パウロはここで、同じ事柄を記すのに異つた言葉でそれを表わしているとも考えられるが、幾種類かのキリスト教徒の歌を区別しているように思える。もしこれらの語が固定されたものとすれば、詩は旧約の詩篇をモデルとした正規の詩のことを言っているのであろう（ルカの最初の章と黙示録を参照）。さんびをもつてわれわれはキリストに対するさんびの頌栄であると理解してよいかも知れない（ブリニウスの手紙を引用）。霊的生活の歌は明らかにす

べての種類の抒情詩的な発声、とりわけ聖霊の衝動から直接に出て来ると思える予期しない突然の発声を含んでいる」⁽¹⁰⁾と述べており、さらに「歌い方の多くは明らかに自発的なものであった。集会において誰かが幼稚な調子の伴奏をつけ、自然にリズムカルな言語へと突発するような感動によって不意に煽動されたのであろう。これらの原初的なさんびは大概は値うちのないものであろう。すなわち、それは瞬間的な産物なのであり、また過ぎ去るや否や忘れ去られたものである。われわれはそれらが同様な興奮の渦のもとでニグロのキャンプ集会で発せられる霊歌と類似せるものとして考えるべきである。しかしながら時折、真実の詩の一節でもがこんな方法で歌われると、また、それが記憶に止められてしばしば繰り返えされるようになったらう。新約聖書に、かかる周知のものとなった数々の賛美歌が引用されているのは疑い得ないし、またわれわれが出喰わすそれらのうちで最も明白なものがエペ 五・一四なのである」⁽¹¹⁾と論じている。

以上の考察からわれわれは自動的に賛美歌の種類に関して結論を得る。すなわち、「詩」は旧約の詩篇頌(Psalmodia)のことであり、「さんびと霊の歌」とは、まだ未分化の状態にあったけれども一定の形をもった賛美歌と固定化せられなかった霊的な創作歌のことである。故に、「さんび」とあるのは異教の流行歌としての *hymnos* でなくて、すでに當時用いられていた一定の賛美歌を指しつつ、少くともエペソ人への手紙の著者はこれを取り入れたのではあるまいか。ともあれ、われわれの興味は詩篇にでも霊的創作歌にでもなく、ただ新約聖書に現われた一定の形の賛美歌に集中するのである。

ロ、旧約的賛美歌と新約的賛美歌

続いて、新約聖書のテキストの中から一定の形をもった賛美歌を選び出し、これらを旧約的なものと新約的なものと分類してみたい。

旧約的賛美歌とはその内容が純福音的なものと言えず、旧約聖書からの引用句を有している場合を指すものと考え

新約聖書に現われた原始教会の賛美歌 (1)

べきである。まず、四福音書共通の記事で、イエスのエルサレム入城の際に群衆の叫んだ賛美歌、「ホサナ、主の御名によつてきたる者に、祝福あれ。今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」は詩 一一八・二六のテーマ「主の御名によつてはいる者はさいわいである。われらは主の家からあなたをたたえます」を引用している。この詩はもととシオンでの礼拝のために上つて行く巡礼者を祝福するものとして作曲されたが、言葉がメシアに対するものへ移されたのであろう。ルカによる福音書には有名な三つの旧約的賛美歌がある。一・四六―四五のマリアの歌、同じく一・六八―七九のザカリヤの歌、もう一つは二・二九―三二のシメオンの歌である。これらはラテン語訳聖書、ヴルガタの訳に従つて、Magnificat, Benedictus, Nunc Dimittis と名づけられ教会音楽史の上でも重要な位置を占めている。マリヤの歌はとりわけ一サム 二・一―一〇の「ハンナの賛美」によつてゐるが、他の二つはいずれも主として詩篇からのルーズな形の引用であり、事後予言の礼典的要素をもつと考えられる。マクドナルドによれば、これらの他、黙示 四・八、一一、一五・三、四、一一・一五―一八、七・一二も旧約的賛美歌であつて、ギリシャ語を話すシナゴグの日常的な礼拝から借りられたものとみなすのが自然なようである⁽¹³⁾。

ルカ 二・一四の Gloria in Excelsis は、旧約的賛美歌ではなく、その起源より考えて新約的賛美歌であると言わねばならない。旧約からの引用がなく、ルカ自身がこれを二度繰り返えして⁽¹⁴⁾おり、ジュリアンもこのベツレヘムにおける天使の賛美歌が初期に属するものとしてゐるからである⁽¹⁵⁾。新約的賛美歌はこのほか、ロマ八・三八―九、ピリ 二・六一―一、一テモ 三・一六、二テモ 二・一一―一三などであり、エペ 五・一四は後述するように明らかな賛美歌である。セルウインは一ペテ 二・六―八が賛美歌の引用句を含んでゐるとしており、ヴインデッシュは同じく二・二一―二五をキリスト賛美歌であると言う。ジュリアンは一テモ 六・一五―一六、テト 三・四―七、ヤコ 一・一七も當時行われていた賛美歌の実際の引用である、と述べてゐる⁽¹⁶⁾。また、マクドナルドは、黙示 一・四―七、五・九―一四、

一二・一〇—一二、一九・一以下と五—八、二一・三以下の五ヶ所の賛美歌は明確にキリスト教徒の創作による、と記している。⁽¹⁷⁾

これらの新約的賛美歌は全部が旧約的用語から全く独立しているものではない。しかるに、ここで新約的と言うのは、あくまでもテキストの全体がその内容からみて純福音的であり、かつ旧約の引用が支配的でないものを意味するのである。一見そうとは見えないテキストでも、特に、ピリ 二・六—一の「キリスト賛歌」のように、新約聖書の中には原始教会の賛美歌が数多く隠されていることを留意すべきであらう。

(2) 詩形と韻律

イ、一定の詩形がコイナー・ギリシャ語に見出されるか

新約聖書に用いられているコイナー・ギリシャ語はアッテイカ方言とイオニア語の要素が混合されて出来上ったものである。古典ギリシャ語は文学的であり、かつその内容も精密なものであるが、日常語としては用いられない人工言語であった。当時の日常語はコイナー・ギリシャ語で粗野な色合をもった方言であったが、生きた言語である。われわれはこの非文学的なコイナー・ギリシャ語にも何らかの詩形なり、韻律なりを見出すことを期したい。

そもそも、古典ギリシャ語の韻律には二つの要素がある。一は高低アクセントであり、一は長短の音節である。⁽¹⁸⁾ギリシャ語には三種類のアクセントがある。鋭アクセント、曲アクセント、重アクセントである。鋭アクセントはその全母音がより高い調子で発音されたことを示しており、曲アクセント(鋭アクセントと重アクセントで作られている)は母音が高い調子で始まったが、低い調子に下つて終うことを示し、重アクセントは鋭アクセントや曲アクセントをもたないすべての母音に、理論上属している。これは二つの方法に適用された。第一は、アクセントを置かない母音に、第二には、語の終りの修飾された鋭アクセントに、重アクセントは適用された。⁽¹⁹⁾しかしながら、この重アクセントに問題が

新約聖書に現われた原始教会の賛美歌

(1)

ある。田中・松平両氏の見解によれば、「重アクセントについては異論はあるが、先ず無アクセントと見て差支えない。本来ならば鋭アクセントが置かれるべき語が、この場合は無アクセントになるという意味の記号と考えればよい」⁽²⁰⁾のであるが、はたしてそうであろうか。曲アクセントの場合には鋭アクセントによって高められた調子が、この重アクセントをもつて低くされた筈である。この場合には低くする能力をもっている重アクセントが何故単独で用いられる際にはその能力を失うのであろうか。言語は生きている、文法が言語を制約するのではなくて、逆に、生きた言語が文法を生み出し、これを変えて行く。「無アクセント」とみなすのは論理的ではないと考えられる。重アクセントの本来の意味を尋ねなくてはならない。重アクセントは原語で *Barytonos* (Barytone) である⁽²¹⁾。τόνος は昔の調子、高低を示す語であるが、*Barys* は「重量が重い」、「強い、影響力のある、力強い」、あるいは「威厳のある、重厚な」などの意味のほか、五感に感じることであり、とりわけ音に関しては「強い、深い」の意味を有している⁽²²⁾。ここから、*ἡ βαρεία*、重アクセントの意味を得て文法に用いられるようになった。従つて、重アクセントを「無アクセント」だときめつけるのは当を得ないと言わねばならない。その上、アクセント記号が案出されたのは前二〇〇年頃であり、このことはその頃すでに古典時代のアクセントが不分明になっていたことを物語る。事実前三世紀頃からはギリシャ語のアクセントは高低でなく、強弱を示すようになっていた⁽²³⁾のである。故にわれわれは、強弱アクセントの場合ならばなおさら重アクセントを無視してはならないと結論したいのである。それが一音節のみの語であればともかく、二音節以上で構成されている語においては、重アクセントはその位置で、高低か強弱かいずれかの、強調をなす能力を保持するものと考えなくてはならない。

もう一つの要素である長短の音節についてはどうか。ギリシャの詩はすべて音節の長短がかし出すリズムによつて成り立っている。「ギリシャの文学ほど作者が自分の作品の向上に技術的な力を注いだ文学は外にあるまい。

彼らの作品はすべて、いわば数学的な、その効果を計算した上で組立てられている」のであり、古典時代の叙事詩は人言語による詩であつた。それはギリシャ文学が原則として読まれたものではなくして、聞かれたものであり、「叙事詩にせよ、抒情詩にせよ、前五世紀までは文字によつて発表されることはまずなく、詩人は自作を或いは朗唱、或いはほんとうの歌の形式で発表した」こと⁽²⁴⁾から察して、古典ギリシャ語の場合は三拍子、四拍子、五拍子、六拍子のごとき韻律 (feet) を見ることはできるが、コイナーの場合は長短の音節による韻律を見出すことがほとんど不可能であると考へられる。すでに述べたようにコイナーは非文学的であるが、日常語として用いられ、古典ギリシャ語はその反面、文学的ではあるが、人工的、技巧的であり日常語ではなかつたからである。

新約聖書においては、古典ギリシャ語ではなく、生きた方言としてのコイナー・ギリシャ語が用いられているのである。次項で述べるように、もし韻律がそのテキストの中に発見されるとすれば、長短の音節による韻律ではなく（いろいろと試みたが発見し得ない）、むしろ、高低あるいは強弱のアクセントによる韻律であると考へられる。そして、この推論は実際にテキストにおいて一定の韻律が発見されるに及んで始めて、正当に裏付けられよう。

ロ、新約聖書のテキストに現われた韻律

数多くの賛美歌が新約聖書に見出されることについてはすでに述べた。ここでは旧約聖書から直接の引用をしていない原始教会の賛美歌、とりわけ純新約的賛美歌と考へられるものの中から、三つの顕著な実例をあげて考察したい。

a、一テモ 三・一六は実に鮮やかな韻律を含む賛美歌である。

「キリストは肉において現れ、
霊において義とせられ、
御使たちに見られ、

新約聖書に現われた原始教会の賛美歌

(1)

基督教研究 第三十二卷・第二号

諸国民の間に伝えられ、

世界の中で信じられ、

栄光のうちに天に上げられた」となっているが、これは二行ずつ三部分より成っていて、一行目を除いて他は二つずつのアクセントをもつ。ネストレのテキストに従えば、

ὅς ἐφανερώθη ἐν σαρκί,	3
ἐδικαιώθη ἐν πνεύματι,	2
ὥφθη ἀγγέλοις,	2
ἐκηρύχθη ἐν ἔθνεσιν,	2
ἐπιστεύθη ἐν κόσμῳ,	2
ἀνεκλήθη ἐν δόξῃ.	2

となる。いまひとつの顕著な特色は、各行の動詞形はすべて受動態の⁽²⁵⁾μεで終っていることと、三行目を除いて各行に前置詞のἐνが用いられていることである。簡潔であつても、実によく洗練された賛美歌であると言わねばならない。また、

b、ピリ 二・六——一は「キリスト賛歌」として周知のものであるが、これは二部に分かれたる。第一部は六、七、八節でキリストの謙虚さ、すなわち下降するキリストを歌っており、第二部は九、一〇、一一節でキリストの高揚、すなわち上昇するキリストを歌っている。七節を除いてすべてが三行ずつに分けられ、しかも第一部は一行に大体三つずつのアクセント、第二部は一行に大体四つずつの⁽²⁶⁾アクセントを有している。三種類のアクセントを同等なものと考えるとき、第一部の 六節は三・三・四、七節は三・三・三・四、八節は三・三・三となり、三系列のアクセントがみられる。

第二部は九節が四・四・六、一〇節が四・四・四、一一節が四・四・三となり、四系列のアクセント配置になっている。一見して明白な韻律を有する賛美歌である。次に、

c、黙示 五・一二、一三であるが、ここには先きの二つより、もつと高次なものが見出される。

一二節は九(八)、八、四となっており、一三節は八(九)、八、四となっている。この韻律は三行で九・八・四、あるいは八・八・四の繰り返えしであろう。この一二節と一三節は同時に交唱で歌われたらしいが後に述べる。

以上の考察から明らかに became するように、新約聖書に現われた賛美歌の中でも、古典ギリシヤ文学に匹敵するような詩形と韻律が発見された。たとえコイナーであつても、それが歌となつて歌われた場合には、おのずから韻文の形をとるのである。ただ残念なのは、ほとんどの場合の賛美歌はその内容が重要視され、韻律の形式は軽視されるか、あるいは断片的にしか収められていない点である。

(3) 表現法

イ、楽器

続いて、これらの賛美歌がどのように歌われたかについて考えてみよう。まず、楽器についてであるが、新約聖書には、「立琴」が五ヶ所、「笛」が四ヶ所、「ラッパ」に関して二ヶ所の用例があり、黙示録における用例が断然多く他を引き離している。まず、「立琴」であるが、これは原語で *kythara* であり、キターラのことである。これは古代ギリシヤの撥弦楽器で、本来は精々一二弦くらいまでを枠内の中空に張つたもので共鳴板をもたない。今日でも、ギターやタイターに結びつけられるが、むしろハープに近いものである。⁽²⁷⁾ 次に、「笛」は原語で *aulos* となっており、古代ギリシヤの有簧管楽器で、後のティピア、カラスム、オーボエ、クラリネット等は⁽²⁸⁾この流れを汲むものである。また、「ラッパ」とは *salpinx* のことで、⁽²⁹⁾トランペットとかトロンボーンなどの原初的な形を指しているように思われる。

新約聖書に現われた原始教会の賛美歌

(1)

これらの楽器が賛美歌の伴奏として用いられたか否かについては決定的なことは言えない。前三世紀頃から、音楽は二つの流れに分かれた。一は人声を重んじた宗教的、芸術的音楽であり、一は遊戯や快楽のための音楽で、楽器を伴ったものである。しかるに楽器を用いた後者は卑俗化の一端を辿ったから、宗教的賛美歌には楽器は不適當であつたと考えられる。その上、烈しい迫害の最中であつては、派手で大きな音を出す楽器は實際上用いられはしなかつたであろう。しかし、エペ五・一九「主にむかつて心からさんびの歌をうたいなさい」は「主にむかつて心から歌い、また音楽を奏しなさい」と訳すべきである。すなわち、ここでは *psalm* が立琴によつて歌うことの意味に用いられてよいのである。黙示録においては、三ヶ所がこの推察を根拠づけるものと考えられる。

笛とかラッパは、恐らく用いられなかつたであろうが、立琴は、見者ヨハネの時代には実際の礼拝において用いられることがあつたのではなからうか。礼拝様式が次第に整備されてきて、賛美歌が集会で重要な位置を占める頃には、少くともこの立琴が賛美歌を伴奏するものとして、あるいは歌い出しの音程を決定するものとして用いられたこともあるであろう。けれども、人声があくまでも重んじられ、楽器の助けなしにその面目を發揮していたのである。

ロ、歌い方

イエスとその弟子達は最後の晩餐を終える時にハレル詩篇を歌つたらしい。少年時代に恐らくラビから教育を受けたと思われるイエスみづからが音頭をとり、怪しげな、人によつては調子はずれの声で、使徒たちはついて行つたのである⁽³²⁾。イエスとその弟子達が用いたのはギリシャ・ローマ的なものではなく、ユダヤ数の詩篇であつた。野村氏は「最初のキリスト教徒達の音楽はこうしたユデア教的なものを根幹とし、当時の文化世界の音楽たるギリシャ・ローマ的な音楽と豊かに接触しながら形成されていったに違いない。東方的ユデア的音楽の根本形式は詩篇頌(Psalmodia)であつて、それは導入部と中間終止部と本終止部において僅かの旋律的な形を示す他は、一定の高さでただ歌詞が読まれるの

である⁽³³⁾と論じている。ところが、パウロの時代には、さきにみたように、西方的ギリシャ的な韻律をもつキリスト教独自の賛美歌が生れている。一コリ 一四・一五には「霊でさんびを歌うと共に、知性でも歌おう」となっている。この箇所はパウロが理性的でない感動主義をコリントの人々にいましめているところであるが、ここでは「絶頂感における発声」が時々呂律の廻らぬ、発音不分明のチャントの形式をとること、また、理解し得る言葉なしの、あるいは判然としたメロディを伴わない歌の形式をとることはありそうなこと⁽³⁴⁾なのである。また、行伝 一〇・四六には「それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである」と記されているが、これも恐らく歌詞もメロディも理解し得ないような自発的な感動の発声であつたろう。

しかしながら、こうした意味の判らぬ歌い方の時期にも一定の内容と韻律を伴った賛美歌は大切に保存されて来たであらう。新約聖書のところどころで、われわれが見出し得る賛美歌の断片こそこのような種類の歌であつた筈だからである。そして、見者ヨハネの時代⁽³⁵⁾には、会衆全部によつて交唱で歌われていたらしい。トラヤヌス帝にキリスト教徒の礼拝について書き送ったブリニウスの手紙によると、「彼らは神と同様にキリストに対して交唱で歌っていた」と記されている⁽³⁶⁾。黙示録が書かれた時期とほど接近している頃の手紙である。事実、われわれは黙示 五・一二、一三が交唱の形式で歌われていたことに同意する。一四節は「アーメン」をもつてこの賛美歌を閉じているのであるから、この時期にはすでに、賛美歌が原始キリスト教の礼拝において重要な位置を占めていたと言える。マクドナルドは、交唱の形式が古代のギリシャ劇の伝統を有するのみでなく、ユダヤ人の詩篇頌のうちにより詳細に実行されていた旨を指摘している⁽³⁷⁾し、ジュリアンの辞典もブリニウスの手紙が初期に聖餐式で賛美歌が用いられていたことを示しているとしている⁽³⁸⁾のである。

歌い方にも種々なる変遷があつた。けれども、一貫して人間の肉声が主であつて、古代音楽の系統をひく斉唱(unison)

基督教研究 第三十二卷・第二号

が発展の途上にあったと考えられる。ところが、実際の会衆を構成していたのは成人の男性ばかりではなく、女や子供も多く居たであろうから、斉唱であつても、少くとも一オクターブの隔たりを有し、大勢集まる礼拝においては豊かな色彩の倍音(over-tone)が朗々と鳴り響いていたことであろう。そして、この「キリスト教の声楽は他の古代音楽とちがつて享樂的な分子も、祭典的な分子もなく、迫害の中に、貧しい人々のあげた真実の信仰の叫びである。絢爛な古代文化が幻のように消えたあとに、残るものはこの素朴きわまる魂の音楽であつた」⁽³⁹⁾のである。

ハ、楽譜

それではこれらの賛美歌はどのような旋律で歌われたのであろうか。われわれはその楽譜を見出すことも、再現することもほとんどできない。「古代ギリシャ、ビザンツ初期から一〇世紀頃までは文字記譜法で、ギリシャではアルファベットを横にしたり、半分書いたりして音を記した。文字記譜法」⁽⁴⁰⁾であつた。パピルスの中でもユーリビデスの「オレステス」の断片とか、凱歌およびアジャックスの自殺を諷する曲をもつ断片などが発見されて音楽図鑑⁽⁴¹⁾に収められている。いずれも判読は困難であるが、明らかに文字記譜法が用いられている。野村氏によると、「殊にエジプトのオクシリネコス(Oxyrhynchos)から発見されたものは、キリスト教の讃歌なのである」⁽⁴²⁾と述べて楽譜が示されているが(「附表一」、有能な音楽学者が文字記譜法を解読して五線譜に再現したものであろう。

もし、われわれに楽譜を再現する手掛りが許されているとすれば、テキストのアクセントと音節の長短のみが、ごく基本的な原則を提供してくれるだけである(「附表二」)。

以上、新約聖書に現われた賛美歌に関して、主として外形について述べてきたが、次にその内容に関して考察したい。

〔附表 I〕

オクシリノコス発見讃歌の一部

新約聖書に現われた原始教会の賛美歌 (1)



...po-ta-mon rhothi-on pa-sai



hym-noun-ton d'he-mon pa-te-ra chui...

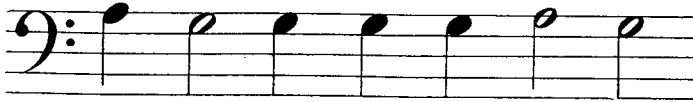
野村良雄，前出書，3頁。

解読に際しての経過が判れば，貴重な資料となる。

〔附表 II〕

エペソ人への手紙 5:14

バプテスマの際歌われたらしい



ἐ - γει - ρε , ὁ κα - θεύ - δων ,



καὶ ἀ - νάσ - τα ἐκ τῶν νεκ - ρῶν ,



καὶ ἐ - πι - φανύ - σαι σοι ὁ Χρισ - τός .

仮りに、基音を G, accute を A, grave を F, circumflex を A, G とした。短母音は 4 分音符で、長母音は 2 分音符で表現してみた。

少なくとも、基本的な原則によって再現すれば上のようなになるであろう。ただし、当時すでにメリスマ的唱法が行われていたとも考えられるから、不十分なものであることは否めない。

- (1) 例えは、*salmo* は「さんびする」として三ヶ所、「うたう」として一ヶ所、「ほめうたう」として一ヶ所の用例があり、*travus* は「ほめたたえる」が三ヶ所、「さんび」が一ヶ所、「ほまれ」は五ヶ所、「ほめる」は二ヶ所の用例をもつ。
- (2) 何故重要かと言えば、これら九語は単に用例が多いのみでなく、割合からみて、他の異った意味を全くもたないからである。これらはいずれも百%その独自の意味のみに用いられている。
- (3) 語彙だけが、その意味で用いられていないのであって、ヨハ二・一三には他の福音書にあるように、エルサレム入城の際の群衆の賛美歌が見出される。「ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれイスラエルの王に。」カルマン「原始キリスト教と礼拝」昭三二年、四三頁。
- (4) *sal* を挿入してゐるのは (A), K, pm. であり、テキストは P⁴⁶, B, D, Gal, Cl に従つてゐる。
- (5) A. B. Macdonald, *Christian Worship in the Primitive Church*, Edinburgh, 1934, pp. 113f. n.5.
- (7) 口語訳のみでなく、ルター訳 N・T・D、モフマツト訳 A・V、R・S・V も両箇所において三語を区別して訳出している。
- (8) A. B. Macdonald, loc. cit.
- (9) Moffatt の訳は 'songs of the spiritual life.'
- 新約聖書に現われた原始教会の賛美歌 (1)
- (10) E. F. Scott, *Col. Philen. Eph.*, (M.N.T.C.), p.75.
- (11) E. F. Scott, loc. cit.
- (12) ユー・一・九、一〇に於いた。 *sonus* は新約聖書において「幸いあれ、祝福あれ」(間投詞)として用いられている。
- (13) A. B. Macdonald, op. cit. p. 113.
- (14) ルカ二・一四と一九・三八。
- (15) J. Julian, ed., *A Dictionary of Hymnology*, New York, 1957, p. 458.
- (16) Idem.
- (17) A. B. Macdonald, loc. cit.
- (18) 高津春繁「ギリシャの詩」昭三四年、四一、二頁を参照
- (19) Hadley and Allen, *A Greek Grammar*, New York, 1885, pp. 25f.
- (20) 田中美知太郎、松平千秋「ギリシャ語入門」昭二六年、七頁。
- (21) W. W. Goodwin, *A Greek Grammar*, Boston, 1896, p. 26.
- (22) H. G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, Oxford, 1871, p. 285.
- (23) W. W. Goodwin, loc. cit. 及び、神田盾夫「新約聖書ギリシャ語入門」昭三一年、八頁。
- (24) 高津春繁「前出書」七、四四、一四頁。

基督教研究 第三十二卷 第二号

- (25) 3 pers. sing. aor. 1, ind. pass. 六語とも同じ形である。
- (26) ネストレのテキストに忠実であるならば E. Lohmeyer の見解は訂正されなければならない。第二部は第一部と異なっており、四つずつのアクセントである。
- (cf. E. Lohmeyer, *Kurios Jesus*, S.4~17)
- (27) 音楽之友社「音楽辞典」楽語篇、昭三一年、一四三頁。
- (28) 同書、一頁。
- (29) W. Bauer, *Wörterbuch zum N. T.*, Berlin, 1952, S. 1348.
- (30) R. S. V. A. V. は 'making melody' となっており、E. F. Scott, *Col. Pilem. Eph. (M.N.T.C.)* p. 234. の「音楽を奏する」意にとっている。
- (31) 黙示 五・八、一四・二、一五・二以下。
- (32) 津川主一「音楽とプロテスタンティズム」昭三二年、二〇頁。
- (33) 野村良雄「宗教音楽史」昭三〇年、二、三頁。
- (34) Robertson and Plummer, *1Cor. (I.C.C.)*, Edinburgh, 1952, p. 312.
- (35) ローマ皇帝ドミチアヌスの治世(八一―九六年)の末期であろう。
- (36) Pliny's Letter to Trajan, c. A. D. 112. '(Christianos) carmen Christo quasi deo dicere secum invicem.' 「彼らは神に対してするやうにキリストに対して……」とも訳される。
- (37) A. B. Macdonald, *op. cit.* p. 114.
- (38) J. Julian, *ed.*, *op. cit.* p. 458.
- (39) 堀内敏三「音楽史」昭三一年、一三頁。
- (40) 音楽之友社「音楽辞典」一四五、六頁。
- (41) 門馬直衛編「音楽図鑑」昭八年、二四頁。
- (42) 野村良雄、前出書、二頁。ただし、いつ頃の賛歌なのかは記していない。